

# ニッポン ドクター和の 臨終図巻



長尾和宏(ながお・かずひろ) 医学博士。東京医大卒業後、大阪大第二内科入局。1995年、兵庫県尼崎市で長尾クリニックを開業。外来診療から在宅医療まで「人を診る」総合診療を目指す。この連載が『平成臨終図巻』として単行本化され、好評発売中。関西国際大学客員教授。

305

俳優

高見のっぽ

## 僕らの心の中で生き続ける

僕は来月で65歳。高齢者となるにあたり、ひそかな夢があります。それはオリジナルCDを出して歌手デビューすること。「65歳の歌手デビューって、ひょっとすると日本最高齢かも？」と思いきや、なんと71歳で歌手デビューしていた人がいると知りました。

その歌のタイトルは『グラスホッパー物語』。おじいさんバツタが、孫のバツタに向けて「公園の外まで跳んで行って広い世界を見ておいで！」と諭す、童話のような世界観に満ちた歌詞です。

そう、71歳で歌手デビューしたのは、長寿番組『できるかな』をはじめ、長年にわたり子供たちへ夢を与え続けた、高見のっぽさん。

そののっぽさんが、昨年9月10日に都内の病院で亡くなっていたこと

が、今年5月10日の高見さんの誕生日に合わせて公表されました。享年88。死因は心不全との発表です。

訃報が8カ月も後になったのは、のっぽさんが生前、「死後半年以上伏せてほしい」と希望していたからだそうです。「人間というのは寿命がくれば、逝くのは当たり前のことだから、自分のことで周りのみなさんを悲しませたり、大切な時間を邪魔したくない」と話していたとのこと。

僕は、そんなのっぽさんの気持ちがなんとなく、いや、とてもよくわかります。

肉体的な死は、自分でそのタイミングを選べません。しかし、社会的な死、すなわち周囲の人にいつ知らせるか、どこまで知らせるかは、ある程度自分で生前に希望を出してもいいのではないかと。



悲しませたくないという気持ちも当然あるだろうし、逆に言えば、死を知らせない限り、その人の中では自分はずっとこの世に存在し続けていることにもなる……「そういえば、あの最近見ないけどどうしてるのかな？」とふと思いついてもらいながら徐々に存在が消えていく。そんな終わり方があっていいと思

うのです。

終わり方といえば、のっぽさんは『できるかな』に20年間、無言で出演し続けました。

初めて声を出したのは最終回。「あ〜あ、喋っちゃった」。その一言は、子供たちの間で大きな話題となりました。

のっぽさんはその後も、子供たちのため絵本の執筆活動やパフォーマンスを続けました。子供という言葉は使わず、「小さい人」と呼んでいたそうです。著書『ノッポさんの「小さい人」となかよくできるかな？ ノッポ流 人生の極意』(小学館)にはこう書かれています。

<どんなに幼い子であろうとも、小さい人と向き合う時はいつも、敬意を表しています。"ひとりの人間として対等に、ていねいに、を、心がけています。どこまでも謙虚で優しく生きた人。僕らの心の中でのっぽさんは生き続けます。>